



◆サマーキャンプ講演要旨◆

夢は叶う！

『꿈은 이루어진다!』

安英学 先生

(元フロサッカー選手・本会奨学生OB)

皆で共同生活することは、すぐく意義があることだと思います。

僕も4年間、朝鮮奨学会から奨学金を受けて大学生活に励んでいました。当時は、少しでも恩返しをしなければいけないという思いで一生懸命やっていましたし、卒業した今も、何か力になれることがあればと思っています。今日は少しでも皆さんの力になり、奨学会の力になればと思います。

僕は岡山県倉敷市で生まれ、5歳の時に東京に引っ越しました。その後は、小学校から高校まで12年間、朝鮮学校に通いました。小学校では、朝、学校に行くときみながらグラウンドでボールを蹴っていて、休み時間もグラウンドに飛び出してまたサッカーをしています。僕も自然とサッカーが好きになり、とにかく没頭しました。上手いか下手かと言えば、下手ではなかったと思いますが、「この子はプロになれるな」というレベルではありませんでした。

◆プロサッカー選手を夢見て
アンニョンハシムニカ。サマーキャンプを楽しんでいますか？
ここにいる皆さんに共通しているのは、朝鮮半島にルーツがあることです。日本の学校や民族学校に行っていたり、韓国から来ていたり、色々なケースがあると思います。今日、こうして出会い、

1993年、僕が中学3年生の時にJリーグが華々しくスタートし、サッカーブームが巻き起こり

ました。僕もいつかあの舞台に立ちたい、プロになりたいという気持ちでずっとプレーしていました。高校2年生の時、それまで朝鮮学校に認められていなかったインターハイ（高校総体）に出場できるようにになりました。3年生の時には、全国高校サッカー選手権大会への出場も認められました。選手権大会は、高校サッカーをやる誰もが憧れる大会です。全国大会出場を目指し、チームみんなが燃えていましたが、東京都予選であえなく敗退してしまいました。実は、そこで僕はサッカー選手になることを一度諦めました。全国大会に出てもプロにならない選手がほとんどですし、全国大会で優勝しても、そこからプロになれるのは1人か2人くらいです。ましてや、全国大会に出られない選手がとてどもプロになどなれるわけがない。もう無理だと自分の中で感じて、サッカーをやめようと思ったのです。

それまでサッカー漬けだったので、青春を取り戻さんとばかりに同級生たちと毎日遊び呆けていま

した。卒業後は就職することにしていました。決して裕福ではない家庭で、母一人で息子二人を育ててくれていました。兄は大学に通っていたので、僕だけでも働いて家計を助けなければいけないと思っていました。

遊び呆けるのも、最初の1〜2カ月はすごく楽しかったのですが、だんだん飽きてくると、空しさを覚えてきました。遊んでいる時は楽しいのですが、夜、布団に入ると虚無感がありました。それまでは、毎日の練習は非常にハードでしたが、「今日も頑張った。明日になれば上手くなっているかな。強くなっているだろうな」と、日々、充実感がありました。でも、その時期は何もありませんでした。空しさとともに、サッカーをやりたいという気持ちがどんどん大きくなっていました。就職すると言った手前、今更またサッカーをやりたいなどとは、母には言い出せずにいました。

悶々とした気持ちのまま迎えた年明けの1月1日、その日は親戚一同が集まっていました。当然の





流れで、僕の卒業後の進路の話になります。すると、十歳年の離れた従兄が突然、「英学、本当はサッカーをやりたいたいだろうか？」と言うので、僕はドキッとしました。そして従兄は、「俺は、やりたいことをやらずに後悔している」と胸の内を明かしてくれました。従兄は事業で成功し、傍から見たらとても幸せそうに見えるのですが、「英学にはそういう人生を歩んでほしくないから、サッカーをやれ」と言うのです。

すでに1月、大学受験にはもう間に合わない時期だったので、「一浪して大学に行き、プロサッカー選手になるために頑張ってみる。もし駄目でも、『一生懸命やっただれども駄目でした！』と、胸を張って帰ってこい。そこからまた違うことをやればいいじゃないか」とみんなの前で言ってくれたのです。

僕はもう、うれしくてうれしくて、涙が出てしまいました。必死に堪えていましたが、またサッカーができると思うと涙が止まりませんでした。「サッカーをやりた

い」と告げると、母はまさか息子がプロ選手になれるとは思っていませんでしたが、大学には行かせたあげたいと思っていたようので、「大学を出てくれるなら、行きなさい。借金してでも送ってあげるから」と言ってくれました。「絶対にプロになるんだ」と決めたのはそこからです。それまでは、「プロになれたらいいな」「Jリーガーになりたいな」という程度の気持ちでした。一生懸命練習はしていましたが、おそらくその程度では夢は叶わないのです。

◆ 恩人との出会い

その日、プロになる決意をしてからは色々なことが巡り合い、噛み合い、動き始めました。何より変わったのは、人との出会いです。今振り返っても、奇跡的とも思える恩人との出会いがありました。

浪人しながら、サッカーの練習をする場所を探していました。友人に相談すると、東京・荒川区に朝青（朝鮮総連系の青年組織）のサッカーチームがあると教えてくれました。さっそく練習に行つた

ところ、そこでキャプテンをしていたのが朴得義さんという方でした。事情を話すと、チームに誘ってくれました。

朴先輩は普段も僕の練習に付き合ってくれました。文京区湯島の東大病院の向かいのグラウンドで、2日に1回5〜6時間、二人きりで練習をしました。その期間はすごく上手くなり、精神的にも強くなりました。朴先輩は僕よりもサッカーが上手で、一緒にボールを蹴っていてすごく練習になりました。何よりとても魂のある人で、何があっても決して逃げません。台風が来ても、雷が鳴つても、雪が降つても練習をします。休むどころか、誰も来ないから貸し切りだと喜んでいいます。見事に誰もいないグラウンドで、二人きりで何時間も、嵐の中、雷の中、雪の中、ずっとボールを蹴っていました。周りで見ていた人は訝しがっていた筈です。

サッカー選手になれるよ」と言ってくれていました。誰よりもサポートしてくれて、誰よりも一緒にボールを蹴ってくれました。そういう存在がいたから僕はプロになりました。朴先輩との出会いがなければ、僕は間違いなくプロになれていなかったと思います。

◆ プロとしてデビュー

2002年にアルビレックス新潟でプロサッカー選手としてのキャリアをスタートさせました。その後、名古屋グランパスエイト、大宮アルディージャ、柏レイソル、横浜FCでプレーしました。その間には、韓国Kリーグでもプレーしました。また、朝鮮民主主義人

民共和国の代表にも選ばれ、2010年ワールドカップ南アフリカ大会にも出場することができました。

これまでも、朝鮮籍の在日選手がKリーグでプレーしたケースはあるのですが、現役の朝鮮民主主義人民共和国の代表選手ということでは、僕が初めてでした。そのことで賛否両論ありましたし、心配する声もありました。当時の盧武鉉大統領政権は、北に対して融和的な政策を取っていたので、南北間の雰囲気は良くなっていたものの、「オファーが来たから行きます」と即決できるほど簡単な決断ではありませんでした。

祖国朝鮮の代表選手になることもまた、簡単ではありませんでした。日本にいたので、日本代表チームや選手の様子などはテレビやネット、雑誌を通じて知っていました。一方、僕は当時、正直言うと自分の祖国の代表選手のことを一人も知りませんでした。顔も名前も知らず、プレースタイルも分かりませんから、なかなかイメージを描きにくいものでした。ただ、

僕の祖国は朝鮮で、いつかは代表入りするのだという気持ちはずっと持っていました。

ワールドカップという舞台で、祖国の選手たちと一緒に、日本で生まれ育った僕が、朝鮮の国旗を胸に、国歌を斉唱し、横にはブラジル代表がいて、感極まるシーンでした。その姿を多くの在日同胞に見せることができ、非常に感慨深く、うれしい瞬間でした。

僕はJリーグでも、Kリーグでも、代表チームでも、選手たちと友情を築いてきましたし、たくさんの方々から声援を受けることができました。僕は決して上手な選手ではありませんでしたが、その分誰よりもよく走って、誰よりも頑張っていて、倒れてもすぐに立ち上がって、そういうプレーを一生懸命続けました。そうしたら、どこにいても応援してもらえました。やはりそういう姿勢が一番大事なのだというのを感じました。

見方によって在日は、どこにいてもアウェイだと言われることがあります。朝鮮に行っても、韓国に行っても、日本にいても、「いつ

もアウェイでホームなどはないのだ」と言う人もいます。でも僕は、どこにいてもホームのような声援を受けましたし、友情を築いてきました。そのような希望を持って、特にこれからの若い人たちには歩んでいってほしいと思います。

※新たな挑戦

FIFA(国際サッカー連盟)に加盟していない、もしくは加盟できない国、地域、民族のチームをまとめるCONIFA(独立サッカー連盟)という組織があります。ワールドフットボールカップという世界大会を開催しているのですが、2018年のロンドン大会に、在日コリアン代表の監督兼選手としてオファーを頂きました。2017年に既に現役を引退していましたが、とても意義のあることだと思い、引き受けました。

今まで、在日の代表チームというものはありませんでした。朝鮮代表が韓国代表か、もしくは「帰化」をして日本代表か。普通は、パスポートを持っている国の代表としてFIFAワールドカップを

目指します。一言で説明すると、ワールドフットボールカップは、そこに参加できないチームの大会です。他には、小さな島国のツバルや、チベットの代表チーム、ジョージアから独立したアブハジアは、ロシアと4カ国くらいからしか国として認められていなくて、FIFAに加盟できていません。そのような国や民族や地域の代表チームが集まる世界大会です。

彼らにとっては、ワールドカップという世界大会はこしにかありませんので、非常に高いモチベーションで参加していました。アイデンティティーをグラウンドの上で100%アピールする、意義のある大会です。サッカーを通じてお互いを知ることにもなり、在日コリアンという存在を世界の人たちに知ってもらう良い機会にもなりました。2年毎に行われているので、僕は2020年大会も目指そうと思っています。もちろん選手としても。

※仲間を大切に

先日、元日本代表の本田圭佑選





手が、僕の住む神奈川の朝鮮学校を訪ねてくれました。僕とは2005年に名古屋グランパスエイトと一緒にプレーしています。僕が新潟から移籍した年に、本田選手が星稜高校から名古屋に入りしました。年齢は8歳違いますが同期入団です。僕のは親しみを込めて「ヒョンニム（兄貴）」と呼んでくれます。

4月27日の南北首脳会談のニュースを見た本田選手から、「自分はうれしく思っています。ヒョンニムはどう思いますか？」とメールが来ました。「もちろん、全ての在日同胞が、歴史的な第一歩を喜んでいて、平和への第一歩を喜んでるよ」と伝えたら、「韓国・朝鮮の友人たち、おめでとう。乾杯」とツイッターに投稿してくれていました。その経緯で、ぜひ朝鮮学校にも一度来てもらえないかとお願いしたら、ワールドカップが終わった後に来てくれました。

生徒たちはもう大喜びで、狂喜乱舞していました。本田選手は「夢」や「絆」の話をして、「仲間」という言葉を添えて色紙を贈ってくれました。僕は、それがすごくありがたかったし、生徒たちも本当にうれしかったと思います。

今、日本と朝鮮の関係が良くないので、何かと報道でネガティブなことも出ます。それはそのまま朝鮮学校へのイメージにつながり、厳しいこともたくさんある中で、彼のように影響力があり日本を代表するサッカー選手が、朝鮮学校の生徒たちに向けて「仲間」と書いてくれたのです。「難しいことは色々あるけれども、ポジティブなものに変えていく努力をお互いにしていこう」というような言葉も言ってくれました。

僕はサッカーを通じて、朝鮮でも韓国でも日本でも、たくさんの方々の選手やサポーターの方々と友情を築いてくることができました。皆さんにとつても、大切なテーマだと思えます。日本で在日として生まれた人、韓国から日本に来て生活している人、それぞれいると思いますが、そういう皆さんにしかできない役割があると思っています。僕はサッカーを通じてその役割を果たしてきましたし、引退し

た今も、僕にしかできないことがあると思ひ、自分なりに考えてやっています。皆さんにも、それぞれ得意なことや好きなことがあると思います。僕は、たまたまそれがサッカーでした。皆さんもぜひ自分の好きなこと得意なことを生かして、多くの仲間をつくってほしいと思います。たくさんの人たちと、お互いに理解し合えるような絆を結んでほしいし、皆さんにはそのような役割があると思っています。これからは、「夢」というものの隣に、「絆」や「仲間」を大切にしてほしいと思っています。

アルビレックス新潟でプレーしていた時、サポーターの方々が、「イギョラ（勝て）！ 安英学！」という歌を作って応援してくれました。僕が国家代表に初めて選ばれた直後に、拉致問題が発覚しました。新潟は拉致問題があった場所です。それでも、「英学には関係ない。自分たちはずっと応援している」と、新潟のサポーターは歌い続けてくれたのです。僕はあの歌声を一生忘れません。自分は奨学会から頂いたご恩も、自分

は一生忘れないつもりでいるし、後輩たちのこれからの夢や目標を応援していきたいと思っています。ぜひ皆さん、それぞれ夢を持つて、自分の好きなこと、得意なことを見つけて、たくさんの人たちと友情を築いて、幸せな人生を生きてほしいと思っています。いつまでも応援しています。今日、初めて皆さんと会ったけれども、これで僕たちは仲間になれたと思っています。

奨学会から頂いたご恩も、自分